60周年特別企画「岡大・知の系譜」シリーズ1

岡山藩医学館・岡山医科大学 特集

～知られざる先駆者たち～

国立大学法人岡山大学は今年（二〇〇九年）、創立六十周年を迎える。それを記念して、講演やシンポジウムなどさまざまなイベントがおこなわれる予定である。

六十年という月日も歴史の重みを感じさせるのに十分だが、本学はその源流を明治の初期にまでさかのぼり、百数十年の伝統を持つことはあまり知られていない。

また、奇しくも本誌も創刊以来五〇号を迎え、それを契機にリニューアルすることとなった。

そこで、創立六十周年と本誌リニューアルを記念し、今号から「岡大・知の系譜」と題し、岡山大学の歴史を三回シリーズで特集する。

▲大正15年頃の岡山医科大学正門

【表紙写真説明】
岡山大学医学部正門
大正十一年（一九二二年）建設。かつての岡山医科大学の正門であり、当時の面影を今に伝える。平成二〇年（二〇〇八年）、国の有形文化財（建築）に指定。

岡山大学、その起源

国立大学法人岡山大学の起源は明治三（一八七〇）年にまでさかのぼる。この年、岡山藩により医学館が設立された。この医学館がさまざまな変遷をへて、大正十一（一九二二）年に岡山医科大学となった。

また、明治三十三（一九〇〇）年に大学の予備教育を行うために、全国六番目の高等学校である第六高等学校が岡山に設立された。

さらに、明治七（一八七四）年に設置された小学校教員養成所・温知学校を起源とする岡山師範学校、大原孫三郎の創設した財団法人大原奨農会の農業研究機関・大原農業研究所（大正三（一九一四）年設立）[※1]

※1　大原孫三郎　おおはらまごさぶろう
1880年～1943年
倉敷紡績社長、クラレ創業者、倉敷の大地主で、大原美術館を創設したことでも知られる。倉敷の資源生物科学研究所は大原農業研究所の後身である。

※2　福沢諭吉　ふくざわゆきち
1835年～1901年
慶應義塾創設者。啓蒙思想家としても知られる。

※3　大村益次郎　おおむらますじろう
1824年～1869年
長州藩医師・兵学者。幕末動乱における新政府軍の指揮官として倒幕を成功に導いた。

※4　緒方洪庵　おがたこうあん
1810年～1863年
彼のつくった適塾（正式名称：適々斎塾）は、のちの大阪大学の源流のひとつとなった。手塚治虫の曽祖父・手塚良仙も適塾の門下生であったことは有名。

※5　シーボルト
フィリップ・フランツ・フォン・シーボルト
1796年～1866年
ドイツの貴族階級出身の医学者。オランダ人と偽って長崎に来訪。ことばになまりがあるところから通詞に怪しまれた際、オランダに山はないにもかかわらず、「私は山地オランダ人だ」と言い張ってことなきをえたというエピソードがある。長崎に私塾・鳴滝塾を開設し、高野長英や二宮敬作など多くの優秀な人材を育て、日本史に大きなあしあとを残した。

【岡大沿革図】

岡山藩医学館 → 第三高等中学医学部 → 第三高等学校医学部 → 岡山医科大学 → 岡山大学

第六高等学校 → 岡山大学

温知学校 → 岡山県師範学校 → 岡山大学

㈶大原農業研究所 → 岡山大学

など、岡山地域には多数の高等教育・研究機関が存在した。

昭和二十四（一九四九）年、これら岡山地域に存在したいくつもの高等教育・研究機関を包括する形で、新制岡山大学が誕生した。

今回は、母体となったこれらの学校のうち、岡山藩医学館・岡山医科大学に焦点をあてて、知られざる先駆者たちを追ってみたい。

岡山の蘭学者たち

岡山県は「医療先進地域」として知られ、江戸時代から多数の医学者を輩出してきた。

たとえば、大坂に適塾を開き、福沢諭吉や大村益次郎[※3]など多くの優秀な人材を育てた緒方洪庵[※4]は備中国足守藩（現在の岡山県岡山市北区足守）の出身である。

また、現在、岡山市表町に「オランダ通り」という地名があるが、これはシーボルト[※5]の娘、楠本イネ[※6]が産科医・石井宗謙[※7]に師事し、この地で医学修行をはじめたことにちなむ。

また、忘れてはならないのが、津山藩における蘭学の勃興（ぼっこう）である。

桂川甫周に師事した宇田川玄随[※8]を祖とする宇田川一門[※9]はめざましい功績をあげ、岡山の蘭学・医学を隆盛させた。

とりわけ特筆すべきは、玄随の義孫にあたる宇田川榕庵[※10]である。榕庵は日本初の近代化学書『舎密開宗（せいみかいそう）』など多くの化学書を翻訳した。榕庵はこれらの書の中で、「酸素」などの元素名、「酸化」などの化学用語、「細胞」などの生物学用語を造語し、日本近代科学の発展に大きく貢献した。

この宇田川一門の系譜につらなるのが緒方洪庵、幕末のわが国を代表する蘭学者箕作阮甫[※11]、そして岡山藩医学館の創立に貢献した生田安宅[※12]である。

岡山の蘭学風土

では、なぜこれほど岡山で医学がさかんになったのだろうか。

社会文化科学研究科・倉地教授は語る。

「名君として知られる岡山藩主・池田光政[※13]がとった社会福祉政策により、岡山藩内の各地には郡医者がおかれ、領民が医療にふれる機会が多くありました。また、岡山地域が温暖な気候に恵まれ比較的裕福だったことも、住民の医療に対する関心を高めることになりました」

光政は日本最古の庶民の学校として「閑谷（しずたに）学校」を創建したことでも知られるように、教育に力を入れ、儒学などの学問の奨励をおこなっていた。そのため、学問を尊ぶ土壌が岡山地域につちかわれていった。

とはいえ、それは伝統的な学問に限られており、岡山は保守的で洋学の導入には消極的だった。そんな岡山に洋学を浸透させたのは、石坂桑亀[※14]の活躍によるところが大きい。

桑亀はまず、世界ではじめて麻酔手術をおこなったことで有名な華岡青州の弟、鹿城（ろくじょう）に師事し、古来の東洋医学と、オランダ式外科学の折衷医術である華岡流外科を学んだ。

桑亀は故郷での開業後、宇田川玄真[※15]の『医範提綱（いはんていこう）』を読んで蘭学をこころざすようになり、長崎に遊学、シーボルトに師事した。

この石坂桑亀がひとびとに受け入れられやすい和洋折衷の外科術をもって活躍することで、しだいに岡山にも合理的な医療を求める機運が形成されていった。

そして新しい医学を求める人々は、西洋医学の地方移植の担い手となっていった。当時の封建社会では、

※6　楠本イネ　くすもといね
1827年～1903年
シーボルトと日本人女性・楠本滝の娘。日本初の女性産科医となった。石井宗謙との間に娘・楠本高子をもうけている。

※7　石井宗謙　いしいそうけん
1796年～1861年
美作勝山藩藩医。シーボルトの鳴滝塾で学び、産科医として名声を博した。のちに江戸で蕃書調所（東京大学の源流の一つに出仕した。

※8　桂川甫周　かつらがわ ほしゅう
1751年～1809年
医師・蘭学者。
前野良沢、杉田玄白らとともに「ターヘル・アナトミア」を訳した。

※9　宇田川玄随　うだがわげんずい
1756年～1798年
津山藩医。
杉田玄白・前野良沢らと交流した。日本最初の蘭和辞典、ハルマ和解の編さんに協力した。

※10　宇田川榕庵　うだがわ ようあん
1798年～1846年
宇田川玄真の養子。
「哥非之説」というコーヒーに関する論文を書いて、日本にコーヒーを紹介したことでも有名。現在でもコーヒーを「珈琲」と書くが、これは榕庵があてた漢字という説もある。

※11　箕作阮甫　みつくりげんぽ
1799年～1863年
津山藩医。のちに幕府に仕え、蕃書調所の首席教授となった。
子孫に「天皇機関説」で有名な美濃部達吉博士がいる。

※12　生田安宅　いくたあたか
1840年～1902年
岡山藩医学館教授。岡山県病院初代院長。

※13　池田光政　いけだ みつまさ
1609年～1682年
備前岡山藩初代藩主。
水戸藩主・徳川光圀、会津藩主・保科正之とならび三名君と称されている。

※14　石坂桑亀　いしざかそうき
1788年～1851年
備中足守藩主木下家の侍医となったが、のちに職を辞し、倉敷で開業医となった。箕作阮甫を宇田川玄真に師事させて、西洋医学の方向へ傾斜させた。

【蘭学者系譜】

- 宇田川 玄真 ---- 石井 宗謙
- シーボルト
  - 緒方 洪庵
  - 児玉 順蔵
  - 難波 抱節
  - 石坂 桑亀
- 緒方 洪庵・児玉 順蔵 ― 津下 精斎
- 緒方 洪庵・児玉 順蔵 ― 明石 退蔵
- 難波 抱節 ---- 生田 安宅
- 石坂 桑亀 ― 石坂 堅壮

地方共同体意識が強固だったので、同郷者をたよった学問の系譜が成立していった。

かくして、岡山地域から多数の蘭学者が輩出されることとなったのである。

岡山藩医学館の創設

石坂桑亀の学んだ華岡流外科からはもう一人、備前の名医が生まれている。難波抱節[※16]である。抱節は全身麻酔による乳がん手術をおこなうなど、名医として全国的に知られ、その学塾・思誠堂には全国から数千人を超える学生があつまったという。緒方洪庵から譲り受けた痘苗（とうびょう）を用いて、岡山において種痘を実施し、多くの人を救った。産科研究でもその名が高く、その著書『胎産新書（たいさんしんしょ）』は江戸時代最高の産科書といわれている。

この難波抱節と石坂桑亀の弟子たちが、岡山藩医学館設立の立役者となる。

明治三（一八七〇）年、版籍奉還にともない、「藩主」から「藩知事」となった池田章政[※17]により、岡山藩医学館が設立された。難波抱節の弟子であり、児玉順蔵[※18]にも師事した、明石退蔵[※19]は医学監督に就任し、医学館発展のために奔走。オランダの二等軍医ロイトルを招聘することに成功している。

また、石坂桑亀の養子・石坂堅壮[※20]が医学教授となった。堅壮は明治十（一八七七）年、農民の病理解剖をおこない、日本初の肝臓ジストマの発見者となったことで知られている。

このような俊英たちと緒方洪庵の適塾出身者が医学館を支えていた。

しかし、医学館は廃藩置県の影響をまともにうける。明治五（一八七二）年、医学館は医学所と改称される。だが、発足したばかりの岡山県は財政基盤が弱く、県費の支給が停止され、医学所は存続の危機に立たされる。

そこで活躍したのが、医学館教授の生田安宅だった。安宅は「津下（精斎）[※21]らと内科、外科の治療を続け、入院も受け、往診も行い、診察代金を稼いで懸命に病院を維持。県には医師養成機関の継続を訴えた。一年ほど耐え忍び、県費支給は復活した。病院で患者治療と医師養成が軌道に乗り、生田は同八（一八七五）年、正式に岡山県病院の初代院長に就任」（山陽新聞「岡山医療ガイド・名医の系譜」）した。

「生田安宅が風前のともしびだった病院を継続したからこそ、今日の岡山大医学部がある。最大の功労者です」（中山沃（そそぐ）岡山大名誉教授「山陽新聞・岡山医療ガイド・名医の系譜」）

生田安宅の活躍により危機を乗り切った岡山藩医学館（医学所）は明治十三（一八八〇）年、岡山県医学校に改組され、西日本有数の医学校となった。

第三高等学校医学部から岡山医科大学へ

明治十九（一八八六）年、「中学校令」が施行された。全国を第一から第五まで区分し、それぞれに地方における高等教育機関として、高等中学校が設置された。

各高等中学校には医学部が設置された。第二（仙台）・第四（金沢）は本校所在地と医学部所在地が一致したが、第一（東京）は千葉、第五（熊本）は長崎と本校所在地とは別の地域に医学部が置かれ、第三（京

※15　宇田川玄真　うだがわげんしん
1770年～1835年
宇田川玄随の養子。杉田玄白の弟子・大槻玄沢の私塾・芝蘭堂の四天王筆頭と称され、日本医学の発展に大きく貢献した。

※16　難波抱節　なんば ほうせつ
1791年～1859年
備前藩家老日置氏の侍医をつとめながら、備前藩金川村（御津町金川）で開業医を営む。

※17　池田章政　いけだ あきまさ
1836年～1903年
備前岡山藩の第十代藩主（最後の藩主）
明治維新後は侯爵に叙任。

※18　児玉順蔵　こだま じゅんぞう
1805年～1861年
長崎に遊学し、シーボルトに学んだ。帰郷し、岡山藩家老の侍医となった。緒方洪庵とも親交があり、弟子の多くが岡山藩医学館の設立に参画している。「備前洋学の始祖」と呼ばれる。

※19　明石退蔵　あかし たいぞう
1837年～1905年
軍医。のちに藩医学館副督事となった。

※20　石坂堅壮　いしざか けんそう
1814年～1899年
倉敷の医学者。「石坂桑亀の養子。
緒方洪庵と交流があり、牛痘苗を分け与えられた。「博物新編拾遺」などの著書を残している。

※21　津下精斎　つげ せいさい
1826年～1899年
岡山藩医学館教授。東京大学医学部の前身である大学東校教授になった嶋村鼎甫は弟。

※22　森有礼　もり ありのり
1847年～1889年
初代文部大臣。一橋大学の創設者。

※23　矢部辰三郎　やべ たつさぶろう
1863年～1924年
日本人として初めてフランスのパスツール研究所に留学。のち、海軍軍医総監・軍医学校長などを歴任。

※24　秦佐八郎　はた さはちろう
1873年～1938年
郷里の島根県益田市に秦記念館があり、紅葉の名所として知られている。

岡山藩医学館・岡山医科大学 特集
～知られざる先駆者たち～

【参考文献】
岡山大学医学部百年史編集委員会『岡山大学医学部百年史』
岡山大学二十年史編さん委員会『岡山大学二十年史』
『岡山医学同窓会報』
岡山県歴史人物事典編纂委員会『岡山県歴史人物事典』
ひろたまさき・倉地克直『岡山県の教育史』（思文閣出版）
山陽新聞・名医の系譜　http://iryo.sanyo.oni.co.jp/kikaku/keihu/index.html
岡山大学創立50周年記念事業委員会『岡山大学50年小史』

都）については岡山に医学部が設置された。

明治二十一（一八八八）年、岡山県医学校は廃止。第三高等中学校医学部が岡山に誕生する。この第三高等中学校医学部設置は、岡山県における医学教育にとって決定的に重要な出来事だった。

明治二十七（一八九四）年の「高等学校令」により、第三高等中学校は第三高等学校に改正。続いて明治三十四（一九〇一）年、第三高等学校医学部の分離独立により岡山医学専門学校が設立。

大正十一（一九二二）年には千葉、仙台、金沢、長崎の各医学専門学校に先立ち、医学専門学校が官立の岡山医科大学に改正された。

戦前、官立の医科大学は全国に六つしかなく、現在でも岡山大学・千葉大学・新潟大学・金沢大学・長崎大学・熊本大学を「旧六」と称することがあるが、それは当時の名残である。

そして、昭和二十四（一九四九）年、「国立大学設置法」により岡山医科大学が岡山大学医学部に移行されたのである。

「東の東大、西の岡山」

岡山県医学校はその教育に定評があった。明治一七（一八八四）年、医学校を視察した文部大臣・森有礼[※22]は、岡山県医学校は教育レベルが高く、関西第一の医学校であると激賞したという。

その反面、岡山県医学校の教育は非常に厳しく、入学するのは比較的容易だが、卒業は難関だった。「定員百人で卒業生はわずか数人に過ぎなかった年もあり（明治二一年は四人だけ）『東の東大、西の岡山』と評価されていた」（小田晧二氏・岡山医学同窓会報平成十一年十月一日号）という。

第三高等学校医学部とその伝統を受け継いだ岡山医科大学は、西日本有数の医学校として全国に名をとどろかせ、数多くの偉人を輩出した。以下、それら偉大な先達を追ってみたい。

第三高等学校・岡山医科大学の人びと

岡山県医学校の第一期生であり、海軍医学校長を勤めた矢部辰三郎[※23]は、アメリカの細菌学書『バクテリア病理新説』を翻訳し、日本で最初に「免疫」という用語を使ったことで知られている。

秦佐八郎[※24]は、ドイツに留学し梅毒治療薬の研究を行った化学療法の先駆者であり、慶応大学医学部の初代細菌学教授を勤めた。日本化学療法学会の「志賀潔・秦佐八郎記念賞」に今もその名を残しており、その細菌研究における功績は大きい。

変わり種では、生命保険の診察医からはじめて、第一生命保険の創業者となった、「日本の保険王」矢野恒太[※25]がいる。

また、日本初の孤児院・岡山孤児院を創立して日本における社会事業・児童福祉の先駆者となった石井十次[※26]もまた岡山医科大学で学んだ。石井は四年で中途退学しているが、のちにその偉業をたたえ、岡山医学同窓会『会員名簿』に卒業者として掲載された。このような例は他にはなく、石井ただ一人である。

岡山県の名知事として知られ、「アジアのノーベル賞」と呼ばれるラモン・マグサイサイ賞を受賞した三木行治[※27]、川崎医科大学などの創設者・川崎祐宣[※28]もまた、岡山医科大学の卒業生である。

伝統と歴史に立脚した岡山大学

今まで見てきたように、岡山大学は数多くの偉人たちの残した伝統と歴史に立脚している。本学の在学生・卒業者は、自分がその伝統と歴史に連なっているということを自覚し、誇りに思っていただきたい。

次回は、本学のもう一つの源流である、第六高等学校の歴史を追ってみたい。

※25　矢野恒太　やのつねた
1866年～1951年
「相互会社の産みの親」とも呼ばれている。日本生命保険会社に入社して診察医となった。独力で生命保険理論を研究。相互主義保険を提唱して共済生命の総支配役となった。「およそ人間の地位や名誉、財産ほどくだらないものはない。わしは無一文で生まれてきたのだから、無一文で死ぬのが理想だ」ということばを残している。

※26　石井十次　いしいじゅうじ
1865年～1914年
「児童福祉の父」とたたえられる。その生涯は映画にもなった。

※27　三木行治　みきゆきはる
1903年～1964年
岡山県知事。
数々の保健福祉施策を実施。現在の水島工業地帯の礎を築いた。その滅私奉公の姿勢からいまでも県民に「桃太郎知事」とたたえられている。

※28　川崎祐宣　かわさきすけのぶ
1904年～1996年
川崎医科大学、川崎医科大学附属川崎病院、専門学校川崎リハビリテーション学院、社会福祉法人旭川荘などを創設した。